
黒ずくめの男

松雪ぽっぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒ずくめの男

【Nコード】

N6169F

【作者名】

松雪ぽっぽ

【あらすじ】

公園で暇を持て余していた絵梨佳。そこへ現れたのは黒ずくめの男。初老の男の何とも奇妙な発言に絵梨佳は：

(前書き)

皆さん、初めまして！

松雪ぽっぽです。

まだまだ駆け出しの小説家で、稚拙な文章かもしれませんが、どうか最後まで読んで下さい。

ある日、私は公園にいた。秋になったせいか、昼間だというのに少し肌寒かった。ベンチに座ってぼーっとしていると、突然風が吹き、一瞬公園の木々が騒めき立った。気付くと、隣に初老の男が座っていた。いかにもお金持ちそうなその佇まいは、公園には不釣り合いだった。そろそろ家に帰ろうかと思っていたら、男は話しかけてきた。

「絵梨佳くん…」

男はポケットから葉巻を取り出し、ライターで火をつけた。

「どうして私の名前を知ってるの？」

「私は昔から君のことを知っているよ。」

男は葉巻を口に加えながら言った。男の吐き出した煙がこの上もなく空へ続く。「どういう意味？」

「そのままだよ。」

「……」

「……」

「……」

「……」

沈黙に耐えきれなくなった私は声を出した。

「だれか共通の知り合いがいましたっけ？」

「運命。」

「運命？ キヤハハ！ おじさん、面白いね！ 大変申し訳ないですけど、私、何処で貴方と出会ったか覚えてないんです。名前さえ言って頂いたらすぐ思い出すと思うんですけど…」

「今日初めて君は私に出会ったから、覚えてるわけじゃないか。」

「え！？ 変な冗談やめて下さいよ。」

「冗談ではないよ。君と私の共通の知り合いは『運命』なんだよ。」

そういうと男は口から煙を吐いた。

私は変なのに捕まってしまったなあと思った。

「あのね、おじさん。よくわかんないけど、私そろそろいかないと……」

私が喋り終わるのを待たずに、男は話を始めた。

「君はやっと気付いたんだよ！ やっとたどり着いたんだよ！！」

「????どこへ??」

私は少し苛立ちを覚えた。このおじさんは何を言っているのだろう。私の問いかけを無視して男は話を続ける。

「小説家、いや、芸術家になりたいんだろ。」

「どうしてそれを!?! まだ誰にも言っていないのに!!!!」

私は冷や汗が出る。この男は一体何者なのだろうか? 人の心が読めるのだろうか?

「『運命』が教えてくれたんだよ。さっき君と僕の共通の知り合いは『運命』だと教えたばかりじゃないか。」

「いや、そうじゃなくて、なんで私の心の中がわかったのかな思ってた……」

「『運命』が教えてくれたんだよ、やっと君が気付いてくれたと。」呆れた私はしかし、この場を去るタイミングを失ってしまったので、とことんこの男に付き合うことにした。それに、何故誰にも言っていないこと、小説家になりたいことを知っているのか、解明しないと気持ち悪いからだ。

「じゃあ、『運命』てなあに？」

「『運命』とは今更説明するまでもないよ。」

男はフツと笑った。黒ずくめの初老の男の笑みは何とも不気味であった。

「君は芸術家になる『運命』なのだよ。芸術以外の道に進むことは許されない。それなのに君は生まれてこの28年間、別の道へ進もうとしていた。やっと今日、ここへたどり着いたんだよ。」

「何言ってるの? 確かに小説家になりたいって今日思い始めたよ。で

もそれは28にもなって定職にも就いてない、彼氏もない、そんな自分が惨めになって、ふと思いついたことであって、だから何か一つでも頑張れること見付けたいなと思って：」

「頑張らなくていいんだよ。君が芸術の道へ進むのは正しいのだから。」

私は変な気分になった。さっきからこの男は何を言っているのだろうか。小説家になりたいと思ったのは今日が初めてだ。まだそれを通してから数時間しか経っていない。芸術家に向いていると言われるのは嫌な気分ではない。でも、いきなり初対面の人に言われても変な気分になるだけである。からかわれてるだけだろうか。そう思うと腹が立ってきた。私は声を張り上げた。

「あのね、おじさん！！私はそりゃ数時間前から小説を書いてみようかな思ったよ。でもそれは、さっき言ったように、キャリアウーマンでもない、恋人もない、なのがいい歳である自分が虚しくなってる：」

「芸術家は芸術のことだけを考えていればいいのだ！」

男は怒鳴った。私は動揺した。どうして初対面のこの男にこんなこと言われなきゃいけないのか。

「でも私は、女として幸せになりたいの。本当は結婚して子供を産んで好きな人の為に生きていきたいの。」

「芸術とは孤独なものだ。そういうのは芸術家じゃない女がすればいい。」

「私はまだ小説家にも芸術家にもなってない。ちよつとなりたいな思っただけ！」

「なりたくないじゃなくなてなるしかないんだ。君は芸術家にならなきゃいけないんだ。」

だからさっきからこの男は何を言っているんだろう。「あんた、さっきから何言ってるの？」

私は興奮していた。今自分がどのような状況に置かれているのか、さっぱりわからなかった。それでも男は話を続ける。

「君は芸術家になる『運命』なんだ。

それ以外に道はないのだよ。

人にはそれぞれ与えられた『運命』があるのだよ。

そもそも君が親とか恋人とかそういうのに縁がないのも、芸術家と
いうのは孤独であるからだ。」

「どうして親のこととか…。占い師なの、おじさんは？」

「私は占い師じゃない。君は芸術家だから、親も恋人も子供もいら
ないんだよ。」

「そんな…ひどい…」

私は泣きそうになった。

「じゃあ、私は何の為に生まれてきたの？」

「わからない子だね。芸術家になる為さ。」

「じゃあ、私のこの大きな瞳は何の為にあるの？運命の人を見付け
る為じゃないの？」

「色んな芸術に触れる為さ。」

「この白い肌は何の為にあるの？好きな人に愛される為じゃないの
？」

「芸術家は大概白く綺麗な肌をしている。」

「じゃあ私のこの手は？運命の人を捕まえる為にあるんじゃないの
？」

「運命の人じゃなくて、芸術が君の『運命』なんだよ。君のその顔
も体も芸術の為以外、ない。」

私は一生誰とも結ばれることはないの？

子供を産むことはないの？

そう思うと涙が溢れてきた。切なくなってきた。

「私は幸せになれないの？」

「芸術とはそういうものだ。」

芸術は孤独が生みだす神秘。

君の手は男を喜ばす為にあるのではない。芸術を生み出す為にある。
」

そういうと、男は葉巻をポケットにしまい、立ち上がった。その瞬間、風が吹き木々が騒めいた。

ふと気付くと、一組の親子が不思議そうにこっちを見ていた。子供がお母さんに、

「あのおねえちゃん、さっきからずっと一人でしゃべってたと思ったら、いきなり泣き出したんだよ。」

と不思議そうに言った。お母さんはしつと子供に小声で叱った。いつの間にか男はいなくなっていた。とうとう男は名を名乗らなかつた。私は何だか恥ずかしくなつてすぐ公園を後にした。

そして私は小説家、いや芸術家になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6169f/>

黒ずくめの男

2010年12月5日15時00分発行